

### Ⅲ 一～五類全数把握感染症



## 一～五類全数把握感染症

## 1. 一類感染症

全国、大阪府とも発生はなかった。

## 2. 二類感染症

結核以外の二類感染症は、全国、大阪府とも発生はなかった。

結核については、下記ホームページを参照されたい。

(財) 結核予防会結核研究所 疫学情報センター <http://www.jata.or.jp/rit/ekigaku/>

(文責：本村)

## 3. 三類感染症

## ●コレラ

2012 (平成 24) 年以来 4 年ぶりに 1 例の届出があり、推定感染地域はフィリピンであった。

## ●細菌性赤痢

届出数は 4 例あり、このうち輸入例は 3 例で推定感染地域はインドネシア、インド、ギニアであった。国内発生例は、家族にインドへの渡航歴があったが、当該家族は無症状で赤痢菌は分離されなかった。患者の症状は、全例で下痢が認められたが血便は 1 例だけであった。3 例で発熱が、2 例で腹痛がみられた。

## ●腸チフス

2 例の届出があり、患者とその関係者 (無症状保菌者) であった。推定感染地域はミャンマーで、患者は高熱、比較的徐脈、バラ疹、脾腫、下痢、腸出血を呈した。

## ●パラチフス

届出数は 2 例で、推定感染地域はパキスタンとインドであった。患者の症状はいずれも高熱、比較的徐脈、脾腫、下痢であった。



7月				8月				9月				10月				11月				12月				合計		
28週	29週	30週	31週	32週	33週	34週	35週	36週	37週	38週	39週	40週	41週	42週	43週	44週	45週	46週	47週	48週	49週	50週	51週		52週	
											1														0	
																										1
																										0
																										0
																										0
																										0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

7月				8月				9月				10月				11月				12月				合計		
28週	29週	30週	31週	32週	33週	34週	35週	36週	37週	38週	39週	40週	41週	42週	43週	44週	45週	46週	47週	48週	49週	50週	51週		52週	
																										0
	1														1											3
																										0
																										1
																										0
																										0
0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4

7月				8月				9月				10月				11月				12月				合計		
28週	29週	30週	31週	32週	33週	34週	35週	36週	37週	38週	39週	40週	41週	42週	43週	44週	45週	46週	47週	48週	49週	50週	51週		52週	
																										1
																										0
																										1
																										0
																										0
																										0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2

7月				8月				9月				10月				11月				12月				合計		
28週	29週	30週	31週	32週	33週	34週	35週	36週	37週	38週	39週	40週	41週	42週	43週	44週	45週	46週	47週	48週	49週	50週	51週		52週	
							1																			1
																										1
																										0
																										0
																										0
																										0
0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2

7月				8月				9月				10月				11月				12月				合計		
28週	29週	30週	31週	32週	33週	34週	35週	36週	37週	38週	39週	40週	41週	42週	43週	44週	45週	46週	47週	48週	49週	50週	51週		52週	
1	2	3	3	7	30	18	1	2	3	3	2	3														116
9		5	7	4	6	2	3		2	2		1	4		3	1	2	1	1	1		3	1	1		61
	1	1					1	2	1						4	1										18
					1		1											1		1				1		5
	1						1		1			1		3												28
			3		1																					5
10	4	9	13	11	38	20	7	4	7	5	2	5	4	6	5	4	1	2	3	2	3	2	1	1		233

●腸管出血性大腸菌感染症

患者144例、無症状保菌者89例の計233例が診断され、例年どおり夏期に多発していた(図1)。HUS患者は1～8歳の7例(有症者の4.9%)で、男児2例、女児5例であった。感染者数10名以上の集団発生は、1月に1事例、8月に2事例がいずれも保育園で発生し、分離株の血清群はO26が2事例、O145が1事例であった。感染者数5～9名の小規模な事例も保育園、社員旅行で3事例(O157 2事例、O26 1事例)発生した。集団事例を反映して0-4歳の感染者が多かったが、有症率は10歳代、20歳代の男性で高率であった(図2)。

図1 腸管出血性大腸菌感染症 週別発生状況 2016(平成28)年1～52週

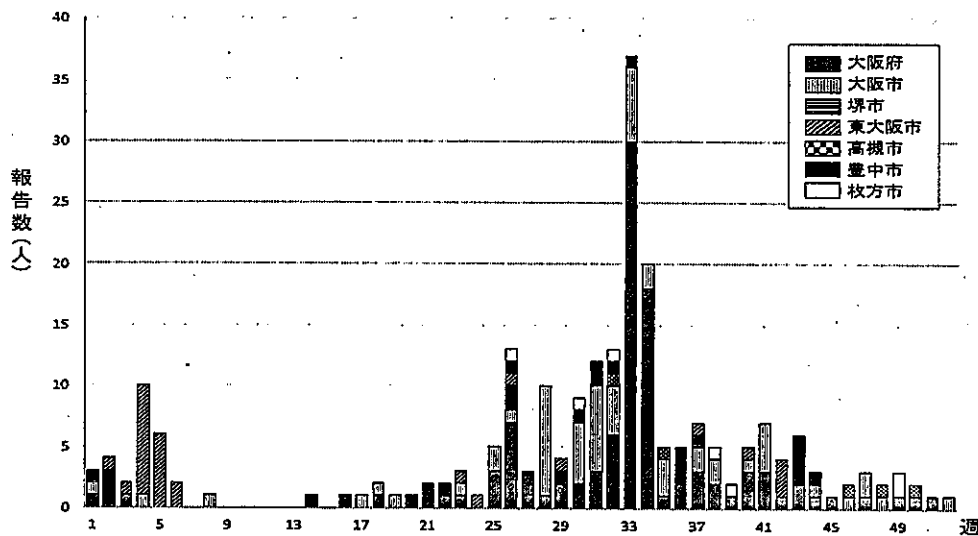
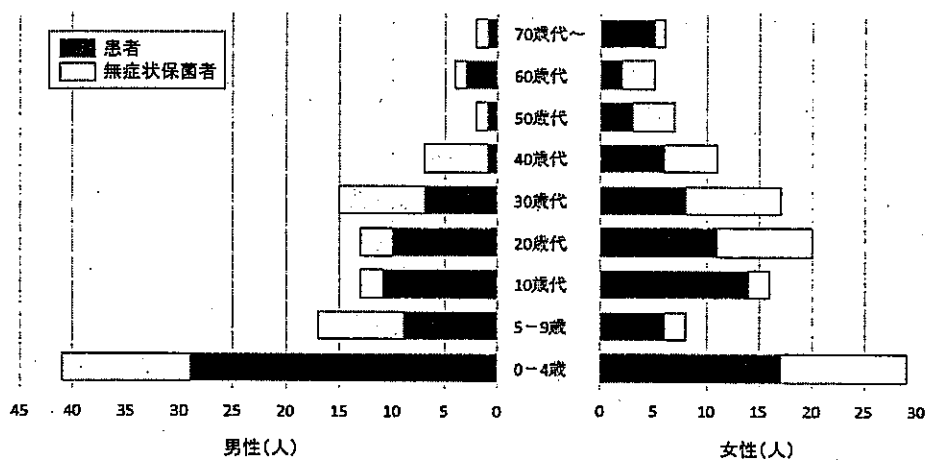


図2 腸管出血性大腸菌感染症 年齢別発生状況 2016(平成28)年1～52週



(文責：勢戸)

#### 4. 四類・五類感染症（全数把握分）

2016（平成28）年における四類・五類感染症の届出数は、30疾患1,662例であった。2015（平成27）年の27疾患1,352例に比べて3疾患増加し、届出数も310例（22.9%）の増加であった。

四類感染症の届出数は10疾患157例であった。報告疾患数は前年より1つ増え、前年届出がなかったジカウイルス感染症が1例、つつが虫病が1例報告された。また、前年届出があったエキノコックス症については報告がなかった。四類感染症の届出数は25例（18.9%）増加した。増加した疾患のうち、E型肝炎は7例の届出があり前年の2例に比べ5例の増加であった。デング熱は36例の届出があり前年の19例に比べ17例（89.5%）の増加であった。また、日本紅斑熱は5例の届出があり前年の1例より4例の増加であった。減少した疾患のうち、レジオネラ症は79例の届出があり、前年の83例に比べて4例（4.8%）の減少となった。

五類感染症の届出数は20疾患1,505例であった。前年に比べ285例（23.4%）の増加となり、前年届出がなかったクリプトスポリジウム症が1例、薬剤耐性アシネトバクター感染症が2例報告された。増加した疾患のうち、梅毒は591例の届出があり、前年の324例に比べて267例（82.4%）の増加となった。麻しんは51例の届出があり前年の2例に比べ大幅に増加した。また、侵襲性肺炎球菌感染症は203例の届出があり、前年の180例に比べて23例（12.8%）増加した。減少した疾患のうち、カルバペネム耐性腸内細菌感染症は138例の届出があり、前年より49例（26.2%）の減少となった。劇症型溶血性レンサ球菌感染症も前年より9例（25.7%）減少して26例が届出された。また、後天性免疫不全症候群は192例の届出があり、前年の220例に比べて28例（12.7%）の減少となった。

五類感染症で届出数の多い5疾患について、大阪府内を大阪府管内、大阪市、堺市、東大阪市、高槻市、豊中市に区分して再掲した。

アメーバ赤痢は、大阪市、東大阪市、豊中市でわずかに増加したが、他の区分ではやや減少した。後天性免疫不全症候群は、大阪市が190例から150例に、高槻市が4例から1例に減少したが、その他の区分では増加傾向が見られた。昨年報告のなかった豊中市で

四類・五類全数把握感染症届出数

種別	疾患名	届出数	
		大阪府内計	全国計
四類	E型肝炎	7 (2)	354 (212)
	A型肝炎	23 (22)	269 (243)
	エキノкокクス症	0 (1)	20 (25)
	オウム病	0 (0)	6 (5)
	回帰熱	0 (0)	7 (4)
	Q熱	0 (0)	0 (0)
	コクシジオイデス症	0 (0)	3 (3)
	重症熱性血小板減少症候群	0 (0)	60 (60)
	ジカウイルス感染症	1 (0)	12 (0)
	チクングニア熱	1 (2)	13 (17)
	つつが虫病	1 (0)	500 (422)
	デング熱	36 (19)	338 (293)
	日本紅斑熱	5 (1)	275 (215)
	日本脳炎	0 (0)	11 (2)
	ダニ媒介脳炎	0 (0)	1 (0)
	ブルセラ症	0 (0)	2 (5)
	ポツリヌス症	0 (0)	5 (1)
	マラリア	3 (1)	54 (40)
	野兔病	0 (0)	0 (2)
	ライム病	0 (0)	8 (9)
類鼻疽	0 (0)	0 (1)	
レジオネラ症	79 (83)	1,592 (1,592)	
レプトスピラ症	1 (1)	74 (33)	
四類合計		157 (132)	3,604 (3,184)
五類	アメーバ赤痢	114 (118)	1,133 (1,109)
	ウイルス性肝炎	25 (20)	273 (255)
	カルバペネム耐性腸内細菌感染症	138 (187)	1,555 (1671)
	急性脳炎	48 (34)	750 (511)
	クリプトスポリジウム症	1 (0)	14 (15)
	クロイツフェルト・ヤコブ病	11 (8)	172 (192)
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	26 (35)	492 (415)
	後天性免疫不全症候群	192 (220)	1,428 (1,431)
	ジアルジア症	6 (12)	71 (81)
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	27 (27)	307 (252)
	侵襲性髄膜炎菌感染症	3 (2)	43 (34)
	侵襲性肺炎球菌感染症	203 (180)	2,693 (2,403)
	水痘(入院例)	28 (28)	313 (313)
	髄膜炎菌性髄膜炎	0 (-)	- (-)
	先天性風しん症候群	0 (0)	0 (0)
	梅毒	591 (324)	4,518 (2,690)
	播種性クリプトコックス症	9 (7)	136 (120)
	破傷風	5 (2)	128 (120)
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	12 (4)	61 (66)
	風しん	13 (10)	125 (163)
麻しん	51 (2)	159 (35)	
薬剤耐性アシネトバクター感染症	2 (0)	33 (38)	
五類合計		1,505 (1,220)	14,404 (11,914)
合計		1,662 (1,352)	18,008 (15,098)

( ) 内は2015(平成27)年のデータ

疾患名	届出数	大阪府内再掲					
		大阪府管内	大阪市	堺市	東大阪市	高槻市	豊中市
アメーバ赤痢	29 (32)	58 (57)	13 (14)	5 (4)	5 (9)	4 (2)	
後天性免疫不全症候群	21 (17)	50 (190)	14 (8)	3 (1)	1 (4)	3 (0)	
梅毒	75 (40)	167 (254)	20 (17)	9 (5)	14 (7)	6 (1)	
カルバペネム耐性腸内細菌感染症	56 (81)	29 (51)	23 (12)	6 (5)	15 (24)	9 (14)	
侵襲性肺炎球菌感染症	73 (74)	91 (66)	13 (28)	7 (2)	17 (10)	2 (0)	

( ) 内は2015(平成27)年のデータ



は3例の届出があった。梅毒は、いずれの区分でも届出数が増加し、大阪府管内では40例が75例に、大阪市では254例が467例に増加し、それぞれ87.5%、83.9%の増加となった。カルバペネム耐性腸内細菌感染症は、大阪府管内、大阪市、高槻市、豊中市で減少したが、堺市では23例の届出があり、前年のほぼ2倍の増加となった。また、侵襲性肺炎球菌感染症は、大阪府管内がほぼ横ばい、堺市が減少となったが、その他の区分では増加した。大阪市では91例の届出があり、前年の66例に比べて25例(37.9%)の増加となった。

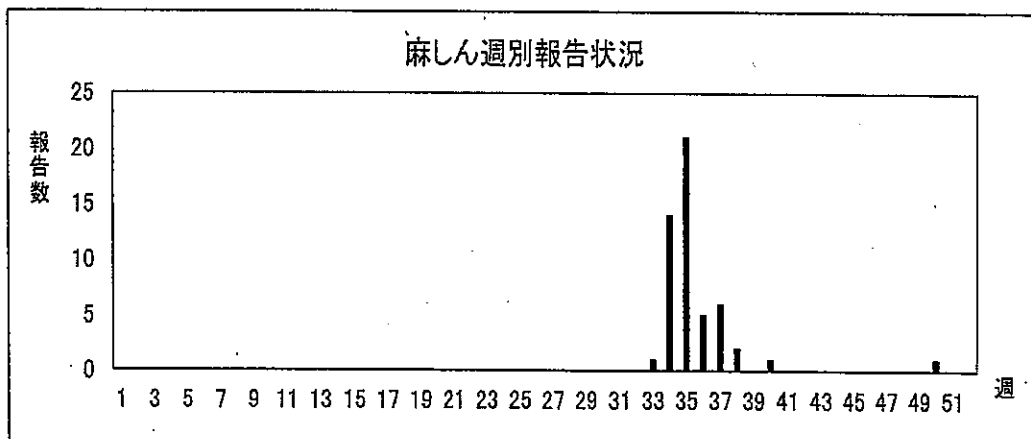
全国の2016(平成28)年における四類・五類感染症の届出数を見ると、18,008例で前年の15,098例と比べて2910例(19.3%)の増加となっている。増加した主な疾患は、四類感染症ではE型肝炎が212例から354例に、つつが虫病が422例から500例に、デング熱が293例から338例に、日本紅斑熱が215例から275例に、レプトスピラ症が33例から74例にそれぞれ増加し、また五類感染症では急性脳炎が511例から750例に、劇症型溶血性レンサ球菌感染症が415例から492例に、侵襲性インフルエンザ菌感染症が252例から307例に、侵襲性肺炎球菌感染症が2403例から2693例に、梅毒が2690例から4518例に、麻しんが35例から159例にそれぞれ増加している。また、減少した主な疾患について見ると、四類感染症では大きく減少した疾患はなく、五類感染症ではカルバペネム耐性腸内細菌感染症が1671例から1555例に、風しんが163例から125例にそれぞれ減少している。

(文責：弓指)

●麻しん

2016(平成28)年の届出数は51例であり、前年の2例に比べ49例の増加となった。

週別届出数は第35週が21例で最も多く、ついで第34週の14例であった。第33週から第38週までは全ての週で報告され、その期間の届出数は49例で全体の96.1%を占



めた。

ブロック別では泉州が32例、大阪市が15例、中河内が2例、北河内と南河内がそれぞれ1例であった。また、年齢別届出数は、20歳以上が50例(98.0%)とほとんどを占め、他に15～19歳の届出が1例あった。

2015(平成27)年3月にWHO(世界保健機関)西太平洋事務局より、日本は麻しんの排除状態にある認定を受けていたが、2016(平成28)年は8月下旬から関西国際空港を中心とした成人による麻しんの集団発生が起これ、届出数もそれを反映したものとなった。海外への渡航者と海外から来日する外国人の増加に伴い、日本国内での麻しんの発生に対する注意は今後も必要であり、成人層へのワクチン接種の徹底などの対策が求められる。

麻しん ブロック別・年齢別報告状況

ブロック	6か月未満	12か月未満	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20歳以上	合計
豊能	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
三島	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北河内	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
中河内	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
南河内	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
堺市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
泉州	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	32
大阪市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	15
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	50	51

(文責：弓指)